

「降ろしてください」

でんしゃ ざせき ひとりぶん せま よゆう
電車の座席に、一人分にはちょっと狭い余裕しかなかったら、あなたはど
うしますか。すわ
座らない？それとも割り込んでしまう？

わりよくけんきゅうしょ しょちょう はなし ひつよう
話力研究所の所長さんが、こんな話をしてくれました。「必要なときに
ひつよう ことば ひつよう おお い かなら
必要な言葉を必要な大きさで言えば、必ずあけてくれるものだ」と。

たとえば、はちにんよう ざせき しちにん すわ せき
たとえば、八人用の座席に七人しか座ってないときに、「すみませんが、席
つ
を詰めていただけませんか」と、そのしちにん みんなむ こえ
七人みんなに向かって声をかけると、
しんぶん よ たぬきねい ひと みな こし う ひとりぶん
新聞を読んでいる人も、狸寝入りをしている人も、皆が腰を浮かせて一人分の
せき
席をつくってくれる。ところが、だま わ こ
黙って割り込もうとすると、あるいはすぐ
そばのひと しかき こえ い じぶん きゅうくつ おも
の人にしか聞こえないような小さな声で言うだけでは、自分も窮屈な思
いをするし、となり ひと めいわく き ひと せき つ
隣の人も迷惑するというのです。聞こえた人は席を詰めようと
するけれども、き こえない人はしらん かお めいわく となり ひと
聞こえない人は知らん顔をしていて、迷惑するのは隣の人だ
けだというわけです。

ご あ でんしゃ なか おお も ひと おく ごういん お
込み合った電車の中で、大きなバッグを持った人が、奥のほうから強引に降
りようとするこうけい み お しつれい
りようとする光景をよく見かけます。「降ろしてください」とも「失礼します」
ともいわずに、ぐいぐいまわ ひと わ すす き も あせ
ぐいぐい周りの人のかき分けて進もうとします。気持ちは焦る
し、にもつ しゅうい ひと きょうりよく ふ
荷物（にもつ）はひっかかるし、周囲（しゅうい）の人は協力（きょうりよく）してくれないしでますます降り
にくくなります。

こんなとき、私^{わたし}はいつも「今^{いま}が必要^{ひつよう}なときですよ」と注意^{ちゅうい}してあげたくありません。ひとこと声^{こえ}をかければ、皆^{みな}がどうにか道^{みち}をつくってくれるはずですよ。
なかには、「降り^おる人^{ひと}がいますよ」と出口^{でぐち}に近い人^{ちか}へ、わざわざ言^いってくれる人^{ひと}だっているかもしれません。無言^{むごん}で強引^{ごういん}な人^{ひと}のときは、本当^{ほんとう}に迷惑^{めいわく}だという気持ち^{きもち}になるのですが、「降^おろしてください」と言われれば、なんとか協力^{きょうり}してあげたいと思うのが人情^{にんじやう}です。

でんしゃなかかぎ私^{わたし}たちの日常生活^{にちじやうせいかつ}ではひとことが足り^たないという場面^{ばめん}がよくあります。「ありがとう」「すみません」のひとことが足り^たないというのはよく指摘^{してき}されるところです。そして、ひとこと足り^たなかったために思^{おも}いもよらない事件^{じけん}が起^おきることもあり、そういう事件^{じけん}を新聞^{しんぶん}やテレビで知^しるたびにとっても残念^{ざんねん}に思^{おも}います。

にんげんことばこころつたあしゅだん人間^{にんげん}には、言葉^{ことば}という心^{こころ}を伝え合^{つた}うすばらしい手段^{あしゅだん}があるのです。これをもっと使^{つか}うべきです。必要^{ひつよう}な時^{とき}という教訓^{きょうくん}は、円滑^{えんかつ}な人間関係^{にんげんかんけい}を保^{たも}つ上で、とても大切^{たいせつ}なことだと思^{おも}います。